
12. 「島原湧水・水屋敷トラスト」をめざして……復興へ

島原復興青年会議
(長崎県島原市)

1. 活動の背景と目的

●島原復興青年会議の設立

2000年ぶりに火山活動を始めた雲仙普賢岳は、平成3年6月火砕流による大惨事をひきおこし災害は長期化の様相を呈していた。危機感を持つ青年たちは既存の青年団体の枠を超えて集結し、平成5年6月『島原復興青年会議』を旗揚げした。

(来るべき復興土木景気に惑わされる事なく) 真の意味での復興振興をめざし、出来ることから活動を始めた。水無川(建設省)、中尾川、眉山(営林署)、自衛隊、火山学者の間を走り回り、情報を集め勉強会を積み重ねた。泉谷しげるコンサートなどエネルギッシュな実践活動にも携わった。

そして……「被災者の生活再建」「防災対策」などは、もちろん大切だが、青年の責務は、むしろ「長期構想のもとでのまちづくり」であることを確認した。

『島原中心市街地街づくり推進協議会』設立に積極的に関わり、地域ごとの5つの研究会を中心に地域再生の一翼を担っている。学習会などの活動を通じて島原再生のカギは島原に初めからある歴史文化と自然、特に全国に誇れる湧水群にあると考えるに至った。

●島原の良さ《水》－島原湧水の象徴、水屋敷群

遠来の友達を案内して、中心市街地を歩き所々に配してある湧水を味わい、今持ち主個人で頑張って公開に踏み切った万町の水屋敷[石川邸]の縁側に座る。

「島原はいいところだねー」と、言われてみて思わずハッとす。私たちはこの島原の良さがわかっていたのだろうか？

島原高校の北側の田屋敷という地名の残る一帯には、濟州館跡を水源として、いくつかの水屋敷群が並んでいる。初夏の夕べに付近を散歩すると蛍が飛び交っている。清少納言も「あはれ」と思うに違いない。

《名水百選》とか《水の郷》とか高い評価を受けている島原の水。この両方を受けているのは数えるほどであるが、さらに特筆すべきは、この湧水群が山奥ではなく市街地の中で生活に密着する形で存在することだ。市街地の中に点在する湧水を考えるとき、生活に密着した形での湧水は「水屋敷」と呼ばれる一連の建築(文化遺産)に象徴される。

湧水を巧みに取り入れた住様式には、昔の人たちの知恵や工夫が随所に見られ、何よりも水に対する感謝の心が表れている。

しかしその一方で、その大切な湧水の大量減少、汚染、湧水を生活に利用した島原ならではの文化遺産「水屋敷」群の荒廃など多くの問題を抱えている。

●ハウジングアンドコミュニティ財団からの助成

この『島原の湧水と水屋敷』を何とか活かさないものか。私たちは、ハウジングアンドコミュニティ財団に活動助成をお願いしてみた。何倍もの競争率をクリアして、私たちの活動に助成金がつくことになった。助成がなくても頑張るつもりでいたが、これで活動に弾みがついた。何よりも私たちの活動の趣旨が認められたことが嬉しい。

●ナショナルトラスト運動

歴史的に価値のある建物や、自然環境で放置しておけば失われてしまう場所を、市民一人一人がお金を出し合って買い取りや借上げをして、保全・活用をしようという運動である。100年前、イギリスで起こったこの運動はイギリスではしっかり定着し、国民の全幅の信頼を受けて、環境保護に、文化遺産の保存にと運営されている。国はこの民間を追いかける形で税金の免除などの支援をしている。

日本では国情の違いもあって、ナカナカ難しい点もあるが、いくつかの地域で、トラスト運動に取り組んでいる。このナショナルトラストの手法が使えないだろうか。文化遺産や環境の保全が目的の一つではあるが、その過程（プロセス）において、市民一人ひとりが、参加していく中で「水の大切さ」を認識してもらうこともまた重大な目的だからだ。

●誇り

島原もまた全国どこにでもある地方都市の欠点は持っている。そのうえに今度のような災害に見舞われ、なんて不幸な町なんだと呪いながらも、この町に住み続ける中で、仲間とネットワークをつくりさまざまな活動を通じて、少しずつ島原の良さを認識するようになってきた。ひょっとするとこの町は相当に素晴らしいすごい町なのではないか。「水」だけをとっても大したものだ。すばらしい「水」を自分たちで守っているんだという自信と誇り。この誇りこそ「まちづくり」の基本なのだ。

●災害復興

雲仙普賢岳災害に対して全国から心温まる支援をいただいた。この支援に「頑張っている姿」で応えたいと思う。私たちが災害復興の牽引車になるんだという気概を持って。

II. 活動の内容

●げんごろう倶楽部始動

「島原復興青年会議」の有志を募った形の委員会に、活動の趣旨に賛同する市民を交えて、ナショナルトラスト準備会の準備会のようなものが出来上がった。後にナショナルトラスト準備会は「島原の湧水と水屋敷を愛する会」としてスタートするが、その活動の推進母体となる実働グループである。毎月6日を定例会と定め、カンカンガクガクの議論の末、名称『げんごろう倶楽部』でスタートした。

●月例会と情報収集

毎月の例会は、単なる決定と報告に終わらないように、テーマを設定して皆の興味を引くように工夫をした。特に専門家を招いての勉強会は、難しい話もわかりやすく、充実したものになった。横浜国立大学の柳沢厚先生のまちづくりの視点に立った湧水活用の話や立正大学の高村弘毅先生の地下水の話など特筆に値する内容であった。

●視察研修

湧水保全の先進地として熊本の白水村を選んで視察を行った。行政との関係、システム作り、来訪者の心理等々参考になる知識

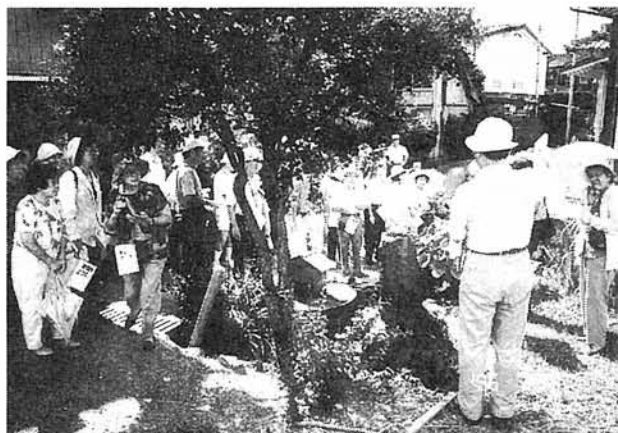


例会の風景

も多く得られたが、一番大事なのは、そこに携わる人々の強い意志と地道な努力である事を確認し、参加メンバーの意識は大いに高まった。

●湧水巡りと実態調査

島原の「水」の良さをまず地元の市民に知ってもらおうと企画した「湧水巡り」は、予想を超える市民の参加があり関心の高さをうかがうことができた。猛暑の中のハードスケジュールにもかかわらず、参加者は皆島原の良さを再発見し満足したようで、げんごろう倶楽部は好意的に認知された。



湧水めぐり（96年7月）

一方メンバーによる湧水調査も根気よく続けられ、水源・共同井戸・水路・水屋敷・水神様等々項目別の聞き取りを含む実地調査はカードにして整理され、行政や研究機関の持つデータと組み合わせれば有効活用が期待できる。

●講演会

前半期に水屋敷の建物調査で、知り合うことの出来た九州芸術工科大学の藤原恵洋先生にお願いして講演会を開催することが出来た。私たちのような運動に欠かすことの出来ない「市民参加型」をテーマに話していただいた。しかも私たちが活動の中に取り入れようとしてなかなかうまく行かなかった「ワークショップ」の事例が多く紹介され、大変参考になった。

●啓発パンフレットの作成

「守りたい 湧水（みず）の住むまち 水屋敷」このたった3行のキャッチコピーをつくりあげるのに、数時間に及ぶ議論が数日続いた。安易に広告代理店等に任せるのではなく、自分たちで血の通った心のこもったモノを作ろうと考えたのだ。もちろん金もないので、写真も私たちの活動趣旨を良く理解してくれるプロカメラマンに格安でお願いした。

パンフレット下方に『島原の湧水と水屋敷を愛する会』の名前を入れた。いよいよナショナルトラストに向けて動き出した。さあこれからが本番だ。



パンフレット

Ⅲ．活動の効果および今後の課題

●底辺の広がり

地元紙「島原新聞」が好意で取り上げてくれる数行の告知板で、市民が何名か「げんごろう倶楽部」に合流した。湧水巡りは70名ほどの参加だったが、その一人ひとりが親しい友人知人に島原の湧水の良さを語り、湧水の減少や汚染に対する危機感を伝えている。げんごろう倶楽部の支持者が増えたというよりも、もともと私たちが感じていることを多くの市民もまた考えていたということだろう。げんごろう倶楽部の活動が底辺を広げたのではない。活動を通じて底辺の広がりに巡り会えたのである。

●人生を賭けるに値する運動

心ある人たちは地球規模で環境破壊を憂えている。家庭内のゴミ処理など小さなところに気をつけながらも、環境より利益を優先してきた歴史の流れに無力感を感じている。

この小さな「心」を集約して、一つの力強い流れにしようという私たちの運動は、実に意義深い人生を賭けるに値する運動である。今後の課題があるとすれば、あとひとりの本気で活動する人間に巡り会う努力をすることであろう。あのイギリスのナショナルトラストでさえ3人の市民の熱意から始まったのだから。